

平成21年 6月10日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520046
 研究課題名（和文） チベット仏教における論理学・認識論の研究
 研究課題名（英文） A STUDY OF LOGIC AND EPISTEMOLOGY IN TIBETAN BUDDHISM
 研究代表者
 白館 戒雲（SHIRATATE KAIUN）
 大谷大学・文学部・名誉教授
 研究者番号：10179062

研究成果の概要：

ダルマキールティの著『量評釈』のうち、宗教論を扱った第2章と、認識論を扱った第3章をタルマリンチェンの註とともに翻訳研究し、さらに伝統的教學の知見を紹介して、インド、チベットでの仏教論理学・認識論を解明した。また第2章の内容に関係する『菩提道次第』について、重要な典籍を翻訳研究した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	630,000	4,130,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：タルマリンチェン・ダルマキールティ・『量評釈』・『解脱道作明』・菩提道次第
 『入菩提行論』・『宝徳蔵般若経』・仏教論理学

1. 研究開始当初の背景

中心となる『量評釈』とその註釈文献に関して現在、必要不可欠とされるチベット語訳とチベット撰述文献であるが、それらを駆使した僧院での伝統的修学方法は、日本語の研究者にとって未知の部分があり、その結果としてそれらの豊富な文献を十分に活用することが難しかった。

副次的な研究として、チベット文化圏で最も重要な「菩提道次第」文献は、その伝達者アティシャがチベットで著したと思われる『菩提道灯論』を除くと、全体が翻訳研究されたものは一つも無かった。最大宗派の開祖

ツォンカパ著『菩提道次第大論』は、その重要性より太平洋戦争期から日本でも翻訳が開始され、英語訳も21世紀になって全三冊として完成したが、日本語では小士、中士、大士の階梯のうち、大士の部分の前半（発菩提心と六波羅蜜と四摂事という菩薩の利他行を扱う）が未翻訳、未研究であった。またそれに次ぐカギユ派の開祖ガンボパ著『道次第解脱荘嚴』も40年以上も前に英訳研究が出て、さらに新しい英語訳も出ているが、この和訳研究もなされていなかった。その結果として、チベット、モンゴル（ゲルク派が国教に近い地位を占めていた）、ブータン（カ

ギユ派を国教としている)の仏教だけでなく、その文化や社会を理解することにも障害となっていた。

2. 研究の目的

『量評釈』とそれに対する『釈論・解脱道作明』のうち、宗教論を扱った第2章「量(認識権威)の成立」、認識論を扱った第3章「現量(直接知覚)」の全体を翻訳し、関連する註釈文献を調査し、そこで現れる幾つかの問題については特に深く論及する。それにより、ダルマキールティの論理学が与えた他宗教や、中観、唯識の哲学への影響をも明らかにすることを、目的とする。

『菩提道次第大論』については大士の道次第の前半を、『道次第解脱莊嚴』についてはその全体を、翻訳研究する。そしてその関連文献としてチベット仏教圏で広く僧俗に用いられている『宝徳蔵般若経』のチベット語訳と註釈文献を、翻訳研究する。

3. 研究の方法

『量評釈』とその『釈論・解脱道作明』については、デーヴェンドラブッディ、プラジュニャーカラグプタなどインド撰述の註釈と、それらに基づき、インド伝来の教学とチベットでの思索を集積したものである。ゆえに、それらを研究し、さらに別の分析を加えたケードゥップ・ジェの註釈、『釈論・解脱道作明』に従ったタナクパ、パンチェン・ソナムタクパの註釈などチベット撰述文献、そして『量評釈』に先行する『集量論』を参照し、近現代の梵語文献の研究をも参照する。

『菩提道次第大論』は、簡潔であり文意の把握しがたい部分もあるので、その読解はそれを継承した伝統に依存する。筆者自身の承けた伝授に基づきながら、さらにそれを確定するために『四割註の合揉』として知られる最も重要な註釈文献を参照して構文を明確にし、マイトレーヤ著『大乘莊嚴経論』、アサンガ著『瑜伽師地論 菩薩地』、シャーンティデーヴァ著『集学論』と『入菩提行論』、アティシャ著『菩提道灯論』、ポトワの語録『青冊子』、トルンパ著『教次第大論』など先行文献をも調査し分析する。『道次第解脱莊嚴』についても同様の手法により翻訳研究する。『宝徳蔵般若経』については、インド撰述の『同経』のハリバドラ、ブッダシュリージュニャーニャの註釈と、関連する『八千頌般若波羅蜜経』と註釈『現観莊嚴論』、それらを承けたチベットでのクンタン・テンペードンメとチョネ・タクパシェードゥップの註釈を研究する。

4. 研究成果

『量評釈』と『釈論・解脱道作明』の第2章全体と第3章全体の翻訳研究が一応、完成できた。そのうち、第2章については全体の5

分の2ほど、第3章については全体の3分の1ほどを、すでに発表することができた。全体の科文を調査し両章の構成を明らかにできたし、チベットでの論理学・認識論の研究の歴史について詳細に研究し、論文を著した。第2章と第3章の未発表の部分についてはやや不十分な研究に終わっている部分が幾つか残っているし、両章に関する索引も未完成であるので、2009年度にそれらを完成させて、それらをまとめて刊行する予定である(第2章については出版が確定している)。

『菩提道次第大論』については未完成の部分を翻訳研究し、これで同著の全体を日本語で読むことが可能になった。『道次第解脱莊嚴』についても同様に翻訳研究し、著作の背景をも考察した。これらにより、大乘一般の思想と行動を解明することができた。後者はすでに発表したが、前者についても新しく索引と科文を作成し、さらに詳細な検討を加えた上で、その全体を刊行したいと考えている。『宝徳蔵般若経』については、クンタン・テンペードンメの註釈とともに全体を翻訳し、関連文献を調査した結果を註記し、さらに諸註釈の対応表を加えた論文を、発表することができた。

ツォンカパの中観思想は、ダルマキールティの論理学とナーガールジュナの中観哲学を総合したものであるとも考えられるので、ツォンカパの中観思想、特に縁起と空の関係について、「縁起に関する考察 一チベット撰述の文献から」において考察した。

伝統的な修学と近現代の研究手法、そして仏教語の翻訳の問題の幾つかについて、「仏道の修学と伝統の継承について一退職にあたって一」において、考察した。

伝統的な仏道修学の体系内にいるチベット人僧侶や研究者に、欧米や日本の近現代の研究者による、チベット語以外のサンスクリット、パーリ、漢訳の文献をも活用した文献研究やインドの遺跡研究や歴史研究の成果を知らせて、双方の学術交流に資することを願って、従来から執筆を続けてきた rGya gar gyi nang pa'i lta grub chos 'byung Legs bshad dka' gnad mdud 'grol (インド仏教思想史、チベット文)を刊行した。

チベット仏教でも宗派を問わず最も広く普及したシャーンティデーヴァ著『入菩薩行論』の特に止観の実践と哲学を説くものとして重要である第8章と第9章について、チベット撰述の註釈書としても最も重要なものの一つの本文校訂、翻訳、研究を従来行ってきたが、さらに著者と同書に関する序論を著し、索引を作成して、それらを『ツォンカパ中観哲学の研究VI タルマリチェン著『入菩薩行論の釈論・仏子渡岸』より第8章「禅定」と第9章「般若」の和訳研究』として、刊行した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

①ツルティム・ケサン (白館戒雲) 藤仲孝司
「タルマリンチェン著『量評釈の釈論・解脱道作明 Thar lam gsal byed』第3章「現量」の和訳研究(3)」(『成田山仏教研究所紀要』32, 2009) pp.157-227

②ツルティム・ケサン (白館戒雲) 藤仲孝司
「ツォンカパ著『菩提道次第大論』「大士の道次第」より菩薩行一六波羅蜜と四摂事一の和訳」(『法談』54, 2009)pp.251-386

③ツルティム・ケサン (白館戒雲) 藤仲孝司
「ツォンカパ著『菩提道次第大論』「大士の道次第」より発菩提心の和訳」(『法談』53, 2008)pp.1-82

④ツルティム・ケサン (白館戒雲) 藤仲孝司
「仏道の修学と伝統の継承について—退職にあたって—」(『仏教学セミナー』88, 2008) pp.1-27

⑤ツルティム・ケサン (白館戒雲) 藤仲孝司
「タルマリンチェン著『量評釈の釈論・解脱道作明 Thar lam gsal byed』第3章「現量」の和訳研究(2)」(『成田山仏教研究所紀要』31, 2008) pp.335-422

⑥ツルティム・ケサン (白館戒雲) 藤仲孝司
「タルマリンチェン著『量評釈の釈論・解脱道作明 Thar lam gsal byed』第3章「現量」の和訳研究(1)」(『成田山仏教研究所紀要』30, 2007) pp.237-307

⑦ツルティム・ケサン (白館戒雲) 藤仲孝司
『チベット語訳『宝徳蔵般若経』の和訳研究』(『法談』52, 2007)pp.56-145

⑧ツルティム・ケサン (白館戒雲) 藤仲孝司
「タルマリンチェン著『量評釈の釈論・解脱道作明 Thar lam gsal byed』第2章「量の成立」の試訳(2)」(『大谷大学真宗総合研究所紀要』24, 2006) pp.1-82

⑨ツルティム・ケサン (白館戒雲) 「縁起に関する考察—チベット撰述の文献から」(『仏教学セミナー』84, 2006)pp.10-30

[図書] (計 3 件)

①ツルティム・ケサン (白館戒雲) 藤仲孝司
『解脱の宝飾—チベット仏教成就者たちの聖典『道次第・解脱荘嚴』』2007年 出版社 UNIO, pp.1-443

②Khang dkar Tshul khirms skal bzang (白館戒雲)

rGya gar gyi nang pa'i lta grub chos 'byung Legs bshad dka' gnad mdud 'grol(インド仏教思想史)2007 西蔵仏教文化協会, チベット文, 2007, 上巻 383 頁, 下巻 462 頁

③ツルティム・ケサン (白館戒雲) 櫻井智浩
『ツォンカパ 中観哲学の研究VI タルマリンチェン著『入菩薩行論の釈論・仏子渡岸』より第8章「禅定」と第9章「般若」の和訳研究』(人間文化研究機構 総合地球学研究所, 2009) pp.1-401

6. 研究組織

(1) 研究代表者

白館 戒雲 (SHIRATATE KAIUN)
大谷大学・文学部・名誉教授
研究者番号: 10179062

(2) 研究分担者

兵藤 一夫 (HYODO KAZUO)
大谷大学・文学部・教授
研究者番号: 30218747

(3) 連携研究者

なし